

図書館だより 第12号

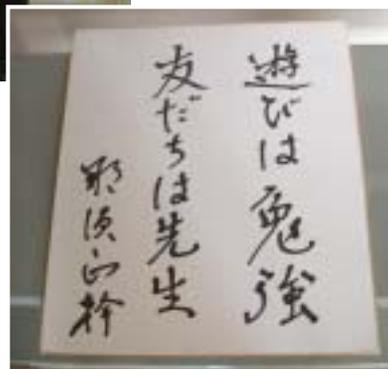
「ズッコケ三人組」の作者^{なすまさもと}那須正幹さんが来館されました



ミニ展示コーナーを
見学される那須正幹さん



記念に書いていただいた直筆色紙



北日本新聞社が2003年に創設した「北日本児童文学賞」にちなみ、富山市立図書館では10月28日～11月30日まで、同賞の選者である児童文学作家、那須正幹氏の著作を集めた展示会を行いました。11月6日には那須氏が来館され、自著コーナーを見学されました。

富山市立図書館では、那須氏のデビュー以来の著作約170点をほとんどすべて所蔵しております。那須氏は「もう絶版で手に入らない作品もある。よくここまで集めてもらった」と感慨深げに見ていらっしゃいました。

目次

特集1	先進図書館見学・千葉県富里市立図書館.....	2
特集2	とやま市民交流館図書サービスコーナー開設！.....	4
	読み聞かせボランティアとしての活動をはじめて.....	5
	音訳ボランティアが厚生労働大臣表彰、富山市表彰を受賞.....	6
	第17回ことばフォーラム報告.....	6
	山田孝雄文庫の資料 12.....	7
	レファレンスあれこれ.....	8

特集1 IC図書館システムを利用した未来型図書館

～ 千葉県富里市立図書館 ～

1. 富里市と富里市立図書館

成田空港の南に位置する富里市は、平成14年に富里町が市制に移行して新設された新しい市です。人口はおよそ5万人、スイカの生産が盛んで、その生産量は全国でも第2位だそうです。そんな新しい市のシンボルとして市の中央に建設されたのが富里市立図書館です。

2. 図書館の特徴



写真1

富里市立図書館は、「自然・人・情報が作る新しい時代の風景」をテーマに造られ、平成15年3月27日に開館しました。建物の道路に面した側は全面ガラス張りになっており、敷地面積7,430㎡、開架・閉架合わせて20万冊の収容能力を誇ります。

富里市立図書館の特徴は、国内で初めて本格的なIC図書館システムを導入したところです。これまでのようなバーコードラベルに代わり、9センチ四方のICタグによって資料管理を行っています。ICタグは離れたところからでもデータを読み取ることが可能で、図書館業務のさまざまな面でそれが活用されています。

貸出・返却システム 貸出・返却窓口のカウンターの机の上に、四角い読み取り窓が設置されています。ここに本を置き、ICタグを機械が

読み取って貸出・返却処理を行います。従来のバーコード式とは違って資料の向きを気にする必要もなく、本を重ねたまま一度に処理できるので手続きにかかる時間が短縮されます。



写真2

自動貸出装置 館内には大人用2台、こども用1台の自動貸出装置が設置されています。これを使うと利用者が自分で貸出手続きを行うことができます。まず利用者カードを右のリーダーに通し、本を中央の台の上に置き、冊数をタッチパネルで入力すると自動的に貸出の手続きが行われます。簡単な操作で使用でき、こどもでも利用しやすいため、現在では貸出冊数の半数以上がこの自動貸出装置によるものだそうです。

利用者のプライバシーを尊重する意味でも、他人に借りた本の内容を知られることなく手続きができるこのシステムは有意義だと思います。



写真3：自動貸出装置

貸出確認装置 この装置は、道路側と駐車場側、2箇所の入口に設置されており、ICタグを利用して資料を管理し、貸出手続きがまだの資料を館外に持ち出そうとすると赤いランプが点滅する仕組みになっています。従来の電磁波によるBDS（ブック・ディテクション・システム）と比べると人体に及ぼす影響も非常に少なく、別の金属類などに反応する誤作動もほとんど起こらない理想的なシステムです。



写真4

蔵書点検システム 写真5のような読み取り機を使用し、背表紙をなぞってだけで資料をチェックすることが可能です。従来の蔵書点検では本を1冊1冊取り出してバーコードをなぞっていく必要がありましたが、このシステムでは本を書架に並べたまま作業ができますので、点検作業の手間と期間が大幅に短縮されます。離れたところからも読み取り可能なICタグの特性が十二分に活かされています。



資料管理 ICチップは資料情報だけでなく配置場所や利用状況などのデータも一括して扱うことができます。そのため、違った場所に配置された資料に対してエラー表示を出したり、利用のない資料を感知して書庫入れする資料の選択に役立てたりする等、さまざまな活用方法が考えられます。

現在は約9センチ四方とサイズが大きいため、文庫本サイズの資料に貼付するのが精一杯ですが、今後技術の進歩とともにそれ以下のサイズの資料にも貼付できるようになるのではないのでしょうか。

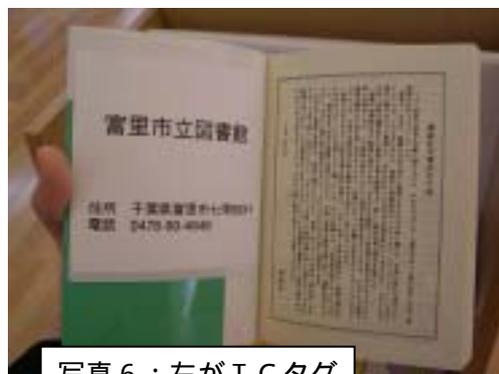


写真6：左がICタグ

3. ICタグとこれからの図書館

現在、図書館・出版業界にとどまらず運輸・流通のさまざまな分野でICタグの導入が検討されています。出版界では、2005年にはすべての書籍にICタグを貼付して、流通管理や万引き防止に役立てようという動きが進んでいます。

図書館では、ICタグのコストが高い点と、サイズが比較的大きめな点、薄い本など、タグが複数重なったときに読み取りにくい点などが導入に当たっての課題となります。今後の性能向上に期待し、当図書館でも将来を展望していきたいと思えます。

ちなみに、県内ではこの4月に移転オープン予定の高岡市立中央図書館でICタグの導入が計画されています。

(中央館 宮本)

特集2 とやま市民交流館図書サービスコーナー開設！

昨年末(平成15年12月1日)富山駅前にあるCICビル3階に、「とやま市民交流館図書サービスコーナー」を新設しました。

この図書サービスコーナーは、中央館の機能を補完し、ビジネス支援サービスなどの展開を目指すものです。

従来の新聞・雑誌・図書と、電子図書やインターネット経由のデジタル情報を提供する、電子図書館(あるいは紙媒体資料とデジタル媒体資料の両方を提供するハイブリッド図書館)の機能を持っています。

富山市立図書館では、平成14年12月のコンピュータシステムの更新を機に、利用者用インターネット端末と電子図書閲覧端末を設置し、また独自ホームページを開設するなど、積極的に「地域電子図書館」としての機能実現を目指しました。実際に利用者用インターネット端末の利用も多く、繁忙時には端末があくのをお待ちいただくこともあります。

しかし、欧米の図書館や国内の先進図書館のような広大なスペースがないため、設置できる端末の台数にも限りがあります。



所在地

富山市新富町1丁目2番3号 富山駅前
CICビル3階 とやま市民交流館
TEL:(076)444-0644 FAX:(076)444-0645

休館日

第3火曜日(3月・12月を除く)・2月の第3水曜日・年末年始(12月29日~1月3日)

開館時間

午前10時~午後9時

サービス内容

<ビジネス支援>

1. 端末8台によるインターネットアクセス
2. 日経テレコン・電子図書等デジタル情報の提供
3. 「とやまインターネット市民塾」によるeラーニング
4. ビジネス関係図書 3000冊
5. ビジネス関係新聞・雑誌

そこで富山駅前という公共交通等地理的条件に恵まれた場所に、開館時間も午後9時までとし、利用者用端末を10台設置して、中央館の補完機能をはたすため、CIC3階に図書サービスコーナーを設けました。

この図書サービスコーナーでは、『2005年の図書館像』(文部科学省の平成12年12月の報告書)で優先的に取り組むべき課題とされた「デジタル媒体の図書館資料の収集・提供」や「商用オンラインデータベース等の外部情報の提供」などを実現しています。たとえば各種雑誌記事索引や「民力」などのCD-ROM資料を利用できます。また「日経テレコン21」が無料で利用できます。「日経テレコン21」のなかの必要な記事はプリントアウト(1枚10円)することができます。

このほか、児童サービスをも実施しています。特に児童向け資料では、英文絵本や、国際ソロプチミスト富山から寄贈された多数の電子図書を備えています。

もちろん従来の中央館や分館と同じように、電話やインターネットで予約しておいた図書を借りることもできますし、中央館や他の分館で借りた図書を返却することもできます。

「ビジネス支援」というキーワード

菅谷明子氏が「進化するニューヨーク公共図書館」(中央公論平成11年8月号)において、ハイテク情報機器を備えた科学産業ビジネス図書館を紹介しました。科学産業ビジネス図書館の眼目は、様々なビジネス支援サービスと、その道具としてのコンピュータの活用という点にあります。

菅谷氏の発言を機に、これまでの公共図書館の貸出偏重政策の反省をこめて、「ビジネス支援サービスや地域活性化サービスを行うべきである」という考え方が出てきました。

千葉県浦安市立図書館や秋田県立図書館などでは、今後重点的に推進すべき図書館サービスとして、「ビジネス支援サービス」を掲げ、サービスを展開しています。

<児童サービス>

1. 端末2台によるインターネットアクセス
2. 子供向け電子図書の利用
3. 絵本・紙芝居等 3000冊

<インターネット予約>

1. インターネット予約された図書の受け取りなどのサービスがご利用いただけます。

読み聞かせボランティアとしての活動を始めて



図書館読み聞かせボランティア養成講座を修了して半年ほどがたちました。後期に修了した仲間も加わり、現在40名が「よみかかせの会」のメンバーとして活動しています。

これまで行ってきた活動は大きく分けると、次の二つです。一つは図書館で行うおはなし会や学校訪問などでの読み聞かせ。もう一つは定期的な学習会です。講座を修了したものの、私たちはとにかく力不足、経験不足。今のところ活動の主眼を「各人が子どもたちの前で読み聞かせを一回は経験する」という事に置いています。子どもたちの前に立つ時には、本選びの段階から職員の方のアドバイスをしっかり受けて行う事がほとんどです。メンバー自身が絵本に関する知識や理解を広げ深めることが大きな課題です。その意味で、学習会を活動のもう一つの柱と位置づけています。

さて、実際に読み聞かせをしてみてどうだったのでしょうか。自分の子どもや孫を相手にした経験しかない人がほとんどだったので、初めて大勢の子どもたちの前に立った時には皆、本当に緊張しました。その時の感想をいくつか紹介します。

- ・子どもたちから笑ったり指差したりなどの反応があると嬉しくなる。交流があると本当に楽しい。
- ・自分が読んだ本を子どもが「これ借りる！」と言ってきて嬉しかった。

- ・本の選び方が本当に難しい。
- ・思った以上に喜んで聞いてくれて、ほっとした。

私自身は、図書館での小学生（2年生と5年生）への絵本の読み聞かせと学校訪問とを経験しましたが、それぞれの場所での子どもたちの反応の違いが興味深く感じられました。絵本やおはなしを本当に楽しむためには、読み手も聞き手も互いに心を素直に開いていることが大切だと思うのですが、つねにそういう状態になれるとは限らないので、なかなか難しいなあと思いました。

ともあれ初めの一步を踏み出した私たち。一人一人が読み聞かせの実践を通して子どもたちの笑顔に励まされ元気をもらい、確かな手応えを感じて、楽しく活動しています。自分の力で適切な本選びができるようになる。心に響く読み聞かせができるようになる。各自がそのような目標を持って学習会を充実させながら、様々な場で経験を積んでいきたいと思っています。一人でも多くの子どもたちが絵本や本に親しむようになる。私たちの「読み聞かせ」が、そのきっかけになればとても嬉しいことです。図書館の皆さんはじめ、いろいろな方のご助力を頂きながら、息長く楽しく活動していけると願っています。

（松崎 訓子）



音訳ボランティアが厚生労働大臣表彰、富山市表彰を受賞

富山市立図書館には、「声のライブラリー友の会」という音訳ボランティアの組織があり、毎月1回研修を重ねながら音訳図書の製作にあっています。現在、会員は76名で、月に約10タイトル(冊)のペースで音訳図書を製作しています。14年度末現在、2,789タイトル、21,374巻に達しました。

一冊の音訳図書が完成するには、音訳する図書の決定に始まり、著作者からの許諾を得(図書館で対応)、原本の下読み、読みの調査、第1回目の録音および校正、修正録音1回目、第2回目の校正、修正録音2回目という作業が必要です。特に読みの調査にはかなりの時間がかかるのです。

今年はその功績が認められ、厚生労働大臣表彰を藤川寿子さんが、富山市表彰を吉田紀子さんがそれぞれ受賞されました。

藤川さんは現在まで298タイトル(冊)の音訳図書を、吉田さんは、657タイトル(冊)の音訳図書を製作しておられます。時間にすると藤川さんは2,682時間、吉田さんは

5,913時間をあてて来られました。

音訳ボランティアの皆さんは書籍から音訳図書を製作するだけでなく、朝日新聞の天声人語を音訳したり、県内のイベントや暮らしの情報を紹介する月刊「声のライブラリー」の製作の他、音訳図書や点字図書を紹介するテレフォンサービス、また音訳ボランティア養成講座の講師と幅広く活躍しておられます。

現在まで富山市立図書館では、カセットテープにより音訳図書を製作していますが、時代の流れからカセットテープやデッキは国内では生産がほとんどなくなり、質も低下しています。いずれはデジタル媒体に移行していかざるを得ない状況にあります。

大阪府立図書館ではデジタル録音図書よりさらに一歩進んで、インターネットで、音訳された作品が聞けるという実証実験を行なっています。一般の視覚障害者は利用できませんが、近畿圏の実証実験協力者のみ利用できます。当館もその協力館として実証実験に参加しています。

(中央館 障害者サービス担当 柴田)

第17回ことばフォーラム「方言の科学 ことばのくにざかい富山」報告



昨年、11月3日の文化の日に合わせて、独立行政法人国立国語研究所と当館との共催により、第17回ことばフォーラム「方言の科学 ことばのくにざかい富山」が開催されました。

当日はあいにく、雨模様の天候でしたが、359名もの方々にご来場いただき、当初の予想を遥かに越える参加者数に驚きました。国語学者山田孝雄を生んだ国語学の素地がここ富山にあったことを思うとなるほど考えさせられます。

午後2時から講演が開始され、第1部では大西拓一郎先生、中井精一先生、真田信治先生の講演が、第2部では相本アナウンサーの司会により3人の先生方のパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションでは、第1部と第2部の間にアンケートを集計した中から、いくつか質問を取り上げてそれに答える

形で進められました。思った以上に多種多様の質問が寄せられて、先生方も限られた時間の中でなるべく多くの質問に回答するのに苦心しておられました。

今回のことばフォーラムの感想でも、9割以上の方が「有意義だった」「富山弁に関心が強まった」とお答えくださいました。市民の皆様の興味ある分野にこういった形で図書館が協力させていただくことも重要なことだと感じました。



(中央館 宮本)

山田孝雄文庫の資料 1 1

実語教注



慈賢注。古写本。宝徳三年(1451年)撰。天正四年(1576年)写。2巻1冊。たて21.9cmよこ19.2cm。49丁。毎半葉9行。薄茶色表紙。題籤剥落。本文・表紙とも補修あり。

らず、智あるを以ってたつとしとす)」というように5字で1句とし、全編96句で構成されている。これに注を施したものが、「実語教注」である。

山田孝雄文庫に所蔵の古写本については、『日本教科書大系 往来編 第5巻』(昭和44年講談社刊)の「解説」の章に、山田忠雄氏所蔵本として、体裁のほか慈賢施註の特徴などが紹介されている。それによると、「施註の特徴は、抛るところの經典を一句についていくつも挙げ、それぞれの文を引用して細々と解説している点に求められる。……註釈に引用した内典・外典の主なものを約九〇種ほど、まとめて掲げている。こうした施註ぶりは、本書の前にも後にも全くみられないので、ひときわ目だっている。」とのことである。

また、山田孝雄文庫蔵本『實語教注』の本文は、癖のある字で判読しにくい箇所もあるが、酒井憲二氏が『翻刻「実語教注」(山田孝雄博士旧蔵・富山市立図書館山田孝雄文庫蔵)』(「調布日本文化」第10号に収載)に、活字化しておられ、内容を知るのに便利である。

(中央館 亀澤)

「実語教」というのは鎌倉・室町時代から江戸時代末までおよそ700年に渡って流布した初学者向け道徳の教材・教科書的一种である。「山高故不貴、以有樹為貴、人肥故不貴、以有智為貴(山高きが故にたつとからず、樹あるを以ってたつとしとす、人肥たるが故にたつとが

レファレンスあれこれ

ビジネス支援特集

最近の実例から質問の要旨と、提供した主要な資料のタイトルの一部を以下にご紹介します。

4階の参考図書室を中心にサービスを行っていますので、ご利用ください。

1. 富山県の人口の推移と運転免許の取得件数について、近年のデータを調べたい。

『富山県統計年鑑』(富山県)

『富山県勢要覧』(富山県)



2. 富山市または富山県内家庭の食費の内訳で、外食に支出した経費の推移を知りたい。

『家計調査報告書 富山市の家計』

『民力 マーケティング必携の地域データベース』(朝日新聞社)



3. 北陸電力が発行した、北陸三県と新潟県の産業マップを参照したい。

『北陸の工場適地』(北陸電力)

『北陸経済レビュー』(北陸電力)



4. 市街地再開発に関わる法律と、その解説を述べた実務的な本を利用したい。

『入門 都市再開発法』(ぎょうせい)

『中心市街地再生と持続可能なまちづくり』(学芸出版社)



5. 講演会の講師に適した人材を紹介する、全国版の人名録を利用したい。

『最新 有名講師・講演料』(日本実業出版社)

『現代評論家人名事典』(日外アソシエーツ)

6. NGOやNPOと称される、民間組織の事業団体を、総合的に収録した名鑑を見たい。

『国際協力・交流 全国NGO・NPO名鑑』(日本外交協会)

『環境NGO総覧』(日本環境協会)

7. 支払い督促の実務について、方法や手順を具体的に知りたい。

『支払督促の申立てと活用法』(自由国民社)

『貸金・売掛金 債権回収マニュアル』(自由国民社)



8. 会社の危機管理について、理論と実際を紹介した実用書を利用したい。

『企業危機管理実戦論』(文芸春秋)

『仕事の《実例》危機管理術』(三笠書房)

9. 訴訟手続きに必要なとされる「申立書」の目的、書式と記入事例を知りたい。

『有斐閣 法律用語辞典』(有斐閣)

『日常書式ハンドブック』(日本文芸社)

(中央館 朝日奈)

平成16年1月23日 富山市立図書館 編集・発行
富山市丸の内1丁目4-50 TEL 076-432-7272
HPアドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp>
E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp